

特集 竹村和子さんのフェミニズム／ジェンダー研究

竹村和子さんの急逝がもたらした欠落は、彼女自身や彼女の言葉に触れた全ての者にとって、今なお何をもってしても埋めがたい。彼女は、ジュディス・バトラー（Judith Butler）等の翻訳を通じて、最先端のフェミニズム思想を日本語で思考する手立てをもたらずと同時に、彼女自身がそうした様々な理論の検討を通して今日のフェミニズム理論の最も先鋭な問題に取り組み、それを自らの言葉で、ぎりぎりまで思考し、論じたことによって、今日フェミニズムを思考し、実践する者すべてにとって不可欠な理論的指針であり続けている。

本特集は、彼女の文学、映像、思想の領域における論考をそれぞれにまとめた形で出版された三冊の、最後の書籍を、私達編集担当者が現時点で最もふさわしいと考えた3人の評者の書評を通して再検討し、彼女が私達に残した成果と問題を明らかにすることを目指している。加えて、彼女の薫陶を受けた2人の若い研究者の研究ノートを通して、それが次世代にどのように引き継がれてゆくのか、という状況の一端を示すことも試みた。

たいへんお忙しい中書評をお引き受けいただき、真摯に竹村さんの言葉と向き合うことでこの上なく力のこもった論考をくださった3人の評者と、2人の若手研究者が身を持って示してくださったとおり、今回の企画が、竹村さんが残した言葉に一人一人があらためて向き合い、それを受け止め、それぞれに発展させることで、彼女の生命を絶やすことなく抱き続ける良き機会となれば、编者（天野知香と館かおる）の責は果たされるといえるだろう。

注記 なお、彼女の著作、翻訳書は、本誌で取り上げた『境界を攪乱する——性・生・暴力』に掲載されているが、竹村和子の思考の過程を跡づける資料として重要であると考え、初出論文一覧及び講演、セミナー、ゼミでの写真も掲載した。

語る者たちの連鎖の中で ——竹村和子さんのF-GENSでの活動を中心に

天野 知香

竹村さんは、2003年度から5年間、本学で展開された21世紀COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア——〈女〉〈家族〉〈地域〉〈国家〉のグローバルな再構築」(F-GENS)において、理論構築と文化表象を担当する「プロジェクトD」のリーダーとして、数々の内外の研究者等の招聘やシンポジウム、研究会の組織、データベース作成に携わった。その活動の記録はプログラム期間中に活動報告として毎年刊行された『F-GENSジャーナル』誌、およびこのプロジェクトのまとめとして出版された全五巻のシリーズの一冊として、竹村さん自身の編著になる『ジェンダー研究のフロンティア5 欲望・暴力のレジーム——揺らぐ表象／格闘する理論』（作品社、2008年）にまとめられている。竹村さん自身が考えたこの書籍のタイトルに挙げられているとおり、欲望と暴力の問題は、いみじくもこの時